

# 国際ミツバチ研究協会



## 文献紹介

**Apicultural Abstracts 45 巻, 1 号 (1994)** には, 文献番号 1/94 から 371/94 までの 371 編が収録されており, 日本からは 13 編の論文が掲載されている。

**Bee World 75 巻 1 号 (1994)** の巻頭には, 世界の蜂の健康状態に関して, Matheson が論説を寄せている。ミツバチヘギイタダニやミツバチトゲダニは, 分布を広げ続けており, 現在は, オーストラリア大陸にも侵入する恐れがある。病気は, 本来の分布範囲内では比較的問題にならないものであっても, 事なる環境では全く違った作用を表す可能性がある。病原体が新しい土地に入ると, ほぼ全群が感染し, ほとんど抵抗できないことが多い。ミツバチの国際間の運搬は, 養蜂産業の確立と維持のためには重要であるが, 蜂の健康状態を考慮にいれた上で行わなければならないと訴えている。

Fries らは「ミツバチヘギイタダニの個体数の変遷」の中で, ミツバチヘギイタダニの繁殖に関する, 以前のモデルに基づき, また, 最近のデータを再調査して, 総合的なモデルを作り出すことを試みた。始めに, ダニの個体群増殖に影響を与える生物学的要因を検討し, それから, これらの要因をダニの個体数の変遷のモデルと合わせて考慮した。他 1 編。

**Bee World 75 巻 2 号 (1994)** の「ミツバチのミツバチヘギイタダニへの耐性—発生, 種類, 繁殖」で, Büchler は, ミツバチの自然群と実験群におけるミツバチヘギイタダニへの耐性を調べている。また, ミツバチの種類によるミツバチヘギイタダニへの耐性の違いを, 成虫によるグルーミングや蜂児の除去, 蜂児のダニに対する誘引性, ダニの不妊化, 巣房をシール

している期間などを指標に検討した。

Poinar は「化石樹脂の中のハチ」の中で, 世界各地で異なった時代の化石樹脂の中に閉じ込められたハチを調べた。その結果, それぞれの時代に生息していたハチの種類が確認された。またハチはダニや他の昆虫から攻撃を受けていることや, 体内に微生物が存在する事が確認され, これは, 共生, 寄生などの生物間の結び付きの証拠ともいえると述べている。

**Journal of Apicultural Research 33 巻 1 号 (1994)** には 10 編の論文が記載されている。その中の「セイヨウミツバチにおける形態と群の防衛の間の相互関係」で, Collins らは, セイヨウミツバチとアフリカ蜂化ミツバチにおける形態と防衛行動との間には相関がなく, 防衛行動だけでは, アフリカ蜂化を受けた地域の確認のための指標としては十分ではないと述べている。

Bonetti らは「蜂の性決定第 30 報。幼若ホルモンがハリナシバチの背板腺の発達に及ぼす影響」の中で, ハリナシバチ 3 種の働き蜂幼虫の吐糸期に幼若ホルモン (JH) を局所処理すると, 女王形質が誘導されることを明らかにしている。ハリナシバチの働き蜂の背板腺は, 第 2 背板にしかないのに対し, 自然の女王蜂と JH 処理により誘導された女王では, 第 3~7 背板にも発達がみられた。他 8 編。

**Journal of Apicultural Research 33 巻 2 号 (1994)** には 10 編の論文が掲載されている。その中で, Patnawin と Wongsiri は「ミツバチ属雄蜂生殖器の頸状突起の走査型電子顕微鏡観察」で, 走査型電子顕微鏡を用いて, ミツバチ属 5 種雄蜂の頸状突起の構造を比較した。構造の類似性により, (1) セイヨウミツバチとトウヨウミツバチ, (2) コミツバチとクロコミツバチ, (3) オオミツバチの 3 つのグループに分類され, さらに, グループ (1) とグループ (3) は, 近い位置に分類されることが推察された。他 9 編。 (伊藤 靖)